

響 風

Hibiki Winds



出展：画集「北九州101景」西川幸男

あしや旬会

第7号

はじめに

平成二十四年一月三十日、貝寄風句会三百回の祝賀会が京都ホテルオークラにて催された。小雪のちらつく京都に集まり、一つの円卓に昇先生を囲んで祝杯をあげた。それは先生の実直な性格と俳句に真摯に取り組む姿勢を慕う者同士が集う温かな宴であった。

第一回の吟行句会は昭和六十二年二月。住んでいた社宅近くを吟行しての俳句作りは、全てが初めてで指を折りながらのたどたどしいものだった。あれから二十五年である。同じ社宅の千種さんからの俳句の誘いに躊躇しながらも参加したのは、子育て仲間として、これからも一緒にいたいという思いからだ。あの当時、まさか自分が俳句を始めるとは思いもしなかったが、こんなに続くとも思わなかった。転勤などで皆バラになっても、それぞれに俳句を作り、千種さんが纏めて昇先生に送り、御選された句がまた千種さんによって送られてくる。しばらくは全て手書きだった。この労力と根気よく御選して下さった昇先生のお陰で続けてこられたのである。

平成二十三年八月、共に過ごした貝寄風句会発祥の地と言うべき新日鉄社宅313棟を、千種さん、温子さん、裕子さんと九州貝寄風の皆と共に訪れた。佳与子さんのお見舞の来北九州であったが、二十五年ぶりの北九州ということで皆で歩いた。313棟社宅一帯は取り壊され、戸建ての家が並んでいるが、一部社宅が残っていた。砂場やブランコなどの遊び場、ゴミの集積場、自転車置き場、敷地内の木々、市場や行きつけだったお店などを回りながら、子育てしながら自分自身も育てられた社宅時代が懐かしく、走馬灯のようにあの頃が思い出された。

俳句は学校で習った程度でほとんど知識もなかったが、千種さんのお母様の桂子さんが京極柁陽の門下であったことから、同じ門下の昇先生が師となり、京極柁陽の俳句を知るようになった。ちょうど大河ドラマで「江」が放送されていたが、浅井三姉妹の二女「初」が嫁いだ京極家の末裔である。柁陽は豊岡藩主の家柄から、官内省勤めの後貴族院議員になったが、新憲法施行により議員の資格を失い、郷里の豊岡に戻り「亀城館」という屋敷に家族と暮らし、俳人として生きた。豊岡には柁陽を慕う多くの俳句愛好者がおり、柁陽死後、毎年十一月八日を「柁陽忌」として法要・俳句句会を行ってきた。何度か末席に座らせていただいた。柁陽を知る人もだんだん少なくなり高齢化していく中、平成二十三年十一月の三十年祭を区切りにしたいという知らせを受け、昇先生もご出席されると聞きさっそく参加を申し込んだ。柁陽の次男・高晴氏は、今までの昇先生の功績を称え、隣同士でこやかに話をされている。一時「柁陽忌」から離れた経緯から、何とも嬉しい光景であった。今後但馬の国・豊岡の御陵に参詣することはないかもしれないが、俳句によって繋がれた縁を大切にしていきたいと思う。

平成二十四年五月

江本由紀子

響風 第七号 目次

■はじめに

■吟行記

第七十五回	北九州の俳人・穴井太	1
第七十六回	東長寺・櫛田神社の節分会	4
第七十七回	大濠公園・舞鶴公園	10
第七十八回	金山川・芦屋海岸	15
第七十九回	金比羅池・夜宮公園	20
第八十回	天拝山麓・山神ダム	25
第八十一回	皿倉山頂	30
第八十二回	地藏盆	35
第八十三回	高見神社周辺	38
第八十四回	博多秋博	41
第八十五回	出石への小旅行	46
第八十六回	妙見山荘	51
■自選句		
三十八〜三十九	平成二十二年十二月〜二十三年三月	53
四十〜四十一	平成二十三年四月〜七月	55
四十二〜四十三	平成二十三年八月〜十一月	57
■あとがき		

吟 行 記

(第七十五回～第八十六回)

第七十五回吟行記

北九州の俳人・穴井太（一九二六〜九七）



夜宮公園前で催された穴井太の句碑開き

戸畑区の新日鐵沢見住宅の近くに天籟寺という地名がある。天籟寺川、天籟寺通り、天籟寺小学校などその名前が使われている。一説では平安時代に「天籟寺」という寺があったことに由来すると書かれたいるが、現在ある曹洞宗の「天籟寺」との関係は分からない。この名前に興味を持ったのは、この地から発行されている「天籟通信」という俳誌があるからである。「天籟」とは「風が物にあたって鳴る音」「すぐれたできばえの詩歌のたとえ」という意味。この地に住み、この地から発信しつづけた俳人、穴井太の句碑が近くの夜宮公園前に建立されている。

夕空の雲のお化けへはないちもんめ

現代俳句の横山白虹の「自鳴鐘」に入会し、昭和卅年「俳句の新しい可能性探求を標榜」するとして「未来派」を創刊、昭和卅五年に俳誌「天籟通信」を発行し続ける穴井太は、俳句誌主宰としても、また中学教師としても多くの人を育てている。

ゆうやけこやけだれもかからぬ草の畏



飛幡中学校敷地内にある「ゆうやけこやけ」の句碑



穴井の最後の勤務地
となった戸畑中学校

(現・飛幡中学校)に

昭和六十年に句碑が建
立されている。彼の俳
句エッセイ集「吉良常

の孤独」に「北九州の
街で育ったぼくの社会

教育の場は原っぱであ
った。…玄海育ちで、

かつ原っぱ育ちなので
ある。…」と書かれ
ている。

夕方親が呼びに来るま
で遊んだ原っぱ、外遊

びに夢中の子供達ほか
りの時代、「ALWAY

Y

S三丁目」の時代である。

句碑のような純粹無垢な句を作った人物はどんな人なのだろうと興味
わく。

穴井は沢見小学校、戸畑工業高校に進み、神戸製鋼に勤める。終戦後、
故郷大分飯田に帰り炭を焼く期間もあるが、中央大学に入学し、卒業後の
二十七歳で戸畑市内の中学教師となる。

あおい狐となりぼうぼうと魚焼く

地へ深くみどりの昆虫おりてゆく

曲がり角で夕陽と別れ明日は白紙

還らざる者らあつまり夕空焚く

俳句に遺す思いについて、「…日常にどっぷり浸っていて、ある時
に日常を越える一瞬を言い止めよう、その言い止め得た姿こそ、私にとつ
ての真の表現たり得るのである」と記されている。

写生句とは違い、「日常を超える一瞬」を俳句にすることは、他者からは
解りづらい面もあるが、真似のできない個性的な世界を作る。

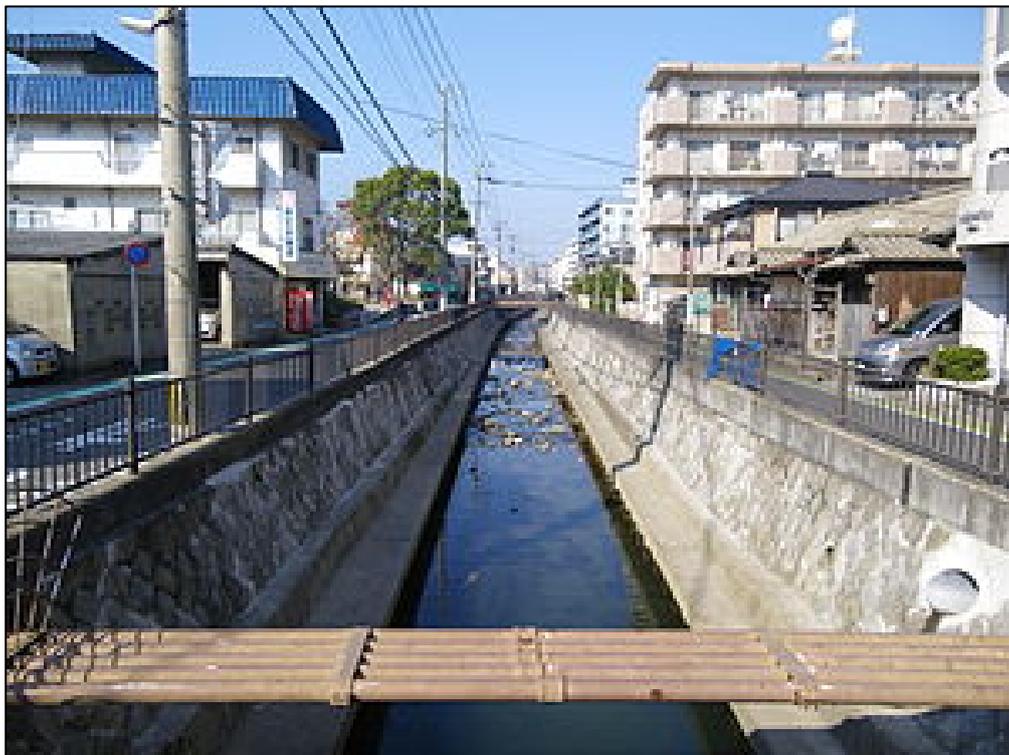
高校時代から同級生と回覧新聞や同人誌作りに熱中した文学青年は、多く
の人から慕われて、平成九年七十一歳の亡くなるまで俳句を作り続けた。

この世から少し留守して梅を見に

【参考文献：「海峡の風」轟 良子著】



【北九州にゆかりのある文学者の直筆原稿や句、書などを背景に、小説、詩、短歌、俳句など様々な分野で活躍した 22 名を紹介。「穴井 太」は一番左の上から 2 番目。】



【天籟寺川】

第七十六回吟行記

平成二十三年二月三日(木)

参加者 佳与子 光子 真理子 由紀子

東長寺・櫛田神社の節分会 (福岡市博多区)

昨年十二月より嫁と生後一ヶ月の孫との同居が始まる。特別忙しいというわけでもなかったのだが、パソコンに向う時間が少なく、ホームページ更新が延び延びになってしまった。三月六日孫たちは引き上げ、また普段の生活に戻ったが、その後大地震、大津波、原発事故など未曾有の災害が



起こり、四月に入ってもなお原発の不安が残り、東北のみならず日本経済全体に影響が及びそうな様相を呈している。一月、二月の事は遠い過去のことのように思え、ずるずると日が過ぎていくばかりだが、福豆を二十個拾った櫛田神社や紅白の餅が飛び込んできた東長寺の節分会の日のことを、忘れないうちに書き留めておこうと思う。

皆の都合が合わず、一月の初旬会がなく、二月もどうなるかと思っていたが、



た真理子さんとも合流。境内は大勢の人で埋まっている。すぐに特設舞台に八十歳を越えた司会役の善男と一緒に七福神がお出まし。ぎこちない動きがユーモラスで福を運んでくれそうだ。七福神の前列に善男善女たちが入場。一人一人紹介される。待ち長い、拾う側は少しでも前へと詰めていく。

ちょっと面をずらし耳打ち鬼やらひ 佳与子

これまでの経験で、豆撒きの豆を拾うには位置取りが重要。前列が一番有利なのだが、だいたい園児など子供たちが並んでいるので少し下がる。撒

く人の年齢、性別から遠くには投げることが出来そうにないので、真ん中くらいに立っていると、次から次へ人が押し入ってくる。いよいよ豆撒き。上へ下へと福豆、ミカン、飴、餅が飛んでくる。

頭を掠め、手を掠めていく。皆必死なので、なかなか拾えない。どうにかこうにか福豆一個、飴二個と体に当っておちた紅白の小餅を手に入れる。佳与子さん、真理子さん、光子さんも同じようなものらしい。怪我せぬことが第一である。

先ず眼鏡はずしとび来る年の豆 佳与子

拾えたる年の豆なり大切に 光子



間隔をおいて、二回目、三回目の豆撒きがあるが、本堂の護摩焚き法要の時刻が迫っている。ビニール袋に靴を入れ本堂に上がる。広い本堂に皆座って時間が来るのを待っている。護摩焚きの真横の席は椅子が置かれ座布団もある。何人がが座り、まだ半分ほど空きがあるのでそこに陣取る。僧侶が七、八名ほどで準備を始める。法螺や銅鑼や太鼓の前に座り、護摩木を高く積み上げる。やがて静まり返った本堂に法螺の音が太く高く鳴り響くと、声明と共に護摩木が焚かれ始める。火勢は強くなり煙が本堂を包む。「歳徳 歳徳・・・」頭を垂れて聞き入る。護摩焚きが終わると、僧侶たちが一斉に教本で一人一人の両肩を叩いてくれる。「鬼やらい」である。

法螺の音と銅鑼にいよいよ追儼かな 光子

なやらいの護摩焚く煙覆い来し 由紀子

なやらいの護摩の火勢のまた強く 由紀子

消えてゆく護摩火に鉦鼓鬼やらひ 佳与子

教本で肩を叩きてやらふ鬼 佳与子

午前の護摩焚きが終り、まだ続いている豆撒きを見て境内を後にする。近くの日航ホテルで昼食。聖子さんとも連絡がつき、榎田神社で待ち合わせる。聖子さんは午前中善女として豆撒きを済ませたらしい。

榎田神社では、それぞれ祈願証に家族や自分の名前を書きお祓いを受ける。



「開運厄除御守護」の御札と「開運豆」を頂く。
 追い山笠会場でもあった特設舞台で豆撒きの声がしている。恒例の博多座で公演中の役者（今年は中村獅童）の豆撒きはすでに終わっていたように、会場は混んではいたが、入れないほどではない。一回挑戦してみたが飴を二〜三個拾えたのみで、再度挑戦する元気が残っていない。境内横で「恵方巻き」を買い、合流した聖子さんと一緒に皆冷泉閣ホテルの一階の喫茶室でゆっくりお茶を飲む。久しぶりの再会を喜ぶが、足腰の弱りや体調のすぐれない時もあるらしく、毎月の吟行を無理に強いることは出来ない。佳与子さんも万全な体調ではないので句会なしの吟行になったが、たまにこういう事もあっていいのかなと思う。

喫茶室を出て聖子さんと別れ、榎田神社のお多福面の前で真理子さんと

別れる。三人で博多駅に向おうとした時、後ろで「本年最後の豆撒きです」と放送している。時計は十六時少し前。せっかくだからと博多駅方面に向けた足を百八十度向きを変えて豆撒き会場に戻る。最後を飾る豆撒きなので、年配の重鎮らしき善男善女がゆつくり並ぶ。こちらの位置取りは端のほうだが、年配の人が投げても届きそうな場所とみて動かず待っていると、やはり絶好な場所だったようで、飛んでくる、飛んでくる。最後とあって一つ残さずのばら撒き状態となり、拾うのが間に合わないくらい降ってくる。佳与子さんは横でみていたとも興奮状態でお互いの収穫を見せ合ってニンマリ。締め「祝い唄」と博多一本締めでお開きとなった会場を後にする。

帰りの電車の中でバッグの中の榎田神社の豆を数えてみると、由紀子二十個、光子さんは確か十六個（若干の違いはあるかもしれないが）と餅。「豆撒きは最終回に限る」と言い



ながら、東長寺、祈願の際に頂いた福豆を合わせて満杯になったバッグを抱えて今年の節分祭を終えた。



【東長寺-1】



【東長寺-2】



【櫛田神社】



【冷泉閣ホテルの喫茶】



【櫛田神社周辺】



第七十七回吟行記

平成二十三年三月十七日(木)

参加者 佳与子 節子 真理子 由紀子

大濠公園・舞鶴公園(福岡市中央区)

この吟行記を書いているのは四月二十二日。東日本大震災の復興は、なお余震の不安と原発災害というやっかいな問題を抱えながら二進一退している。この大災害の余波ではないが、列島は冷え込み、被災地には少し前に雪が降ったという。いつになったら明るさと温みを取り戻せるのだろうか。



大震災から一週間後の三月十七日午前十一時、大濠公園内のレストラン近くで待ち合わせる。風が時折強く吹き、うつすらと芽吹き柳が揺れている。池の周囲をジョギングしている人、歩いている人、足早に通り返している人など、いつもの大濠公園の景色を見ながら句帳を取り出すが寒い。園内に新しく出来たスターバックスで暖をとろうと入る。ちょうど窓際の席が空き、暖かいラティエを飲みながら外を眺める。お互い一ヶ月ぶりなので、すぐには俳句モードにならず、四方山話になるが、集中力は最後に残し、ここでは暖まることを優先する。

外に出るとやっぱり寒い。児童公園で遊ぶ親子も、ホームレスもない。風に鳴が舞いたち、さざ波が揺れる。野鳥の森には鴨らしい鳴声が響き、声の先には記念樹らしい紅梅の花が咲き残っている。ジョギングコースに沿った花壇にはチューリップの芽が始めている。

春寒の湖のさざ波ひたひたと

由紀子

遠嶺の稜線淡し柳の芽

由紀子

公園内の福岡市立美術館のレストランで昼食。大濠公園の池に向かって全面ガラス張りのレストランは明るく、混み具合も程よく句作をしながら食事をする。腹ごしらえをしたところで広い美術館の駐車場を抜けて舞鶴公園へ向う。福岡城址と四季折々の花を楽しめる。天神と西新の中間にあつて都心のオアシスのような場所なので、吟行地を決めかねた時には都合が良い。まず足を運んだ睡蓮の池には鴨が垂直に頭を突っ込んで遊び、わずかに伸びた菖蒲の芽が日に輝いている。



駐車場広々として苗木市

節子

波の影底に映して水温む

真理子

春寒の水辺に一人男かな

佳与子

木の橋に佇み浅き春の風

節子

狭い階段を上ると城の石垣が高々とある。楠の巨木や銀杏大樹や桜の木々が本丸へと続く道に覆いかぶさるように枝を伸ばしている。舞鶴公園

には約千本もの桜の木があるがまだ蕾。その中に例年早く開花する一本の枝垂桜がある。まだ開いてはいないが、今にも開きそうな紅色の蕾はそれだけでも美しい。城と桜は正に日本を象徴する風景だが、この舞鶴公園の満開の桜は、一度は見えておきたい風景の一つ。それだけに花見客も多く、酔っぱらいに興ざめすることもあるが、本丸跡の空に隙間なく広がる満開の桜を初めて見た時の感激は忘れない。今年もまた美しく咲くだろうが、まだ開花宣言のない蕾の下を歩く。天主台から博多湾、ヤフードームなどを望む。

強東風におされて上る天主址

佳与子

一本の枝垂れ桜に芽吹く紅

節子

宿木の空に高舞ふ春の鶯

由紀子

天主台吹き上げてくる木の芽風

真理子

本丸跡から多聞櫓に向う。復元された長い多聞櫓の白壁と広場には春日差しが暖かい。若い作業員が数人障子ほどの板を何枚も運んでは積んでいる。何かが出来るのかと思つたが、どうやら桜祭りに予定されていた夜のイベントが中止になったらしく片付けているようだ。連日の震災や津波の報道に自粛ムードが広がりはじめている。

下萌や多聞櫓の窓いくつ

由紀子

城内は桜まつりの準備中

節子

大地震に桜まつりの中止札

由紀子

式典の中止張紙春寒し

佳与子

網を巡らしたようにひろがっている冬木のような桜の枝の下を抜ける
と梅園に出る。梅の花はすでに盛りを過ぎ、咲き残っている少しの花を見
ながら一回りする。外国人が二組梅園の椅子に座って談笑している。
大手門からお堀に沿ってしばらく歩く。春は桜並木、夏になると蓮花で埋
まる美しい通りだ。ぐるりと周って最初の集合場所の大濠公園内のレスト
ランに着く。

ジェット機の色は桃色春の空

節子

飛機低く街に近づく涅槃西風

真理子

鳥帰る大池巡る人は増え

節子

木の芽風スワンゆっくり動き出す

佳与子

午後になると公園内の人は増え、池のスワンのボートも動いている。飛び
交う鴟がレストランの窓辺からよく見えて園内が活気づいている。十句の
句会。解散。



【多聞櫓】



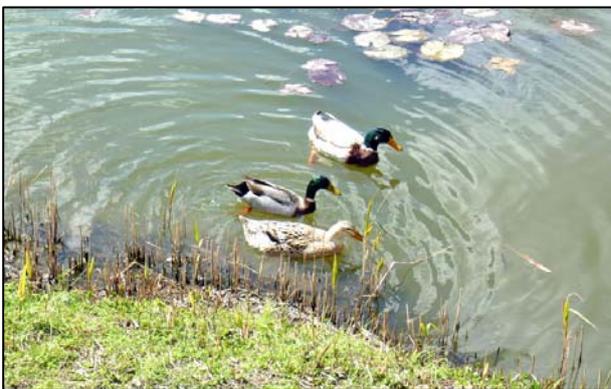
【芽が出始めたチューリップ】



【記念樹】



【福岡城址と舞鶴公園内風景】



第七十八回吟行記

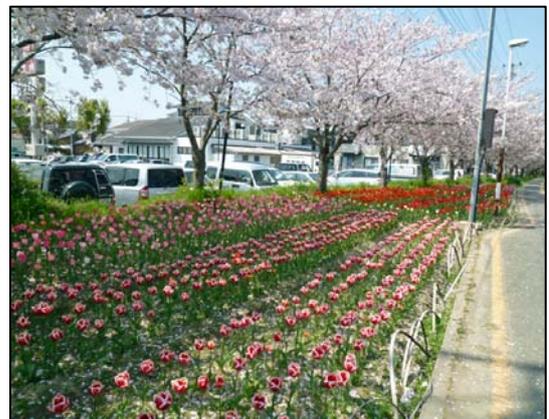
平成二十三年四月十四日(木)

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子
金山川・芦屋海岸(八幡西区、芦屋町)



今年の桜の開花宣言の日には例年と似たり寄ったりだったと思うが、何時までも冬物のコートがいらるほど気温の上がらない日が続き、全般的に開花が遅れている。ようやく四月に入って日中の気温が二十度近くになり、桜の花がちらほらと咲き初め、その後一気に満開となった。満開になっても雨の降る日が少なく、中旬でも朝方の気温は十度前後と低いので、桜を楽しむ時期が長い年になった。

四月十四日折尾駅に十時半集合。車で迎えに行く。若松北海岸、芦屋海岸の吟行の予定にしていたが、前日に見た金山川沿いの桜並木と桜の下のチューリップが美しく、皆に見せたくて少し遠回りしてみる。NPO法人のボランティアの人々の手によって春には菜の花、桜、チ



ューリップなど、秋にはコスモスなどが植えられて行き交う人々の目を樂しませてくれる金山川。兩岸の三百本の桜が散る様はまだまだ見応えがある。種類も色も多い十万本のチューリップは今からゴールデンウィーク頃まで咲いていそう。介護士と一緒に車椅子に乗った老人たちが花を眺めている。近くに老健施設がいくつかあるので、人の少ない平日に花見に来ているのだろう。

水門に寄せては流れ花の屑

佳与子

花見のあと車は一路海岸へ向う。若松ゴルフ倶楽部や乗馬倶楽部を過ぎると海が見えてくる。「はまゆう海岸通り」から見る響灘は所々色の違う青色が美しい。産直の野菜や魚介類の販売所「とと市場」の駐車場に車を止めて海岸に下りて行く。

風は少しあるが、テトラポットに打ち寄せる波は穏やかだ。若布竿を引いている人がある。時期が少し遅いのだと思っ聞いてみると、採った昆布などの海藻を干して粉末状の鶏の餌に使うと言う。甘味のある美味しい卵を生むらしい。そういえば海藻にはヨウ素が多く含まれているので、ヨード卵用の飼料になるのかもしれない。二〜三の大袋に茶色の海藻がぎっしり入っている。



若布刈竿波打ち際に黙々と

節子

大潮の引き去る鹿尾菜いっせいに

光子

風光る礁に波のうねり来て

真理子

一望の灘とめどなく散る桜

由紀子

岬（狩尾岬）に沿った遊歩道を歩いてみる。岬の突端あたりから西側の海は岩場が広がり乾いている。「芦屋の千畳敷」と呼ばれ、満潮時には隠れるが干潮時には姿を現す岩場で、海水が岩の間や窪みに所々残っている。岩場の先で釣りをしている。この辺りはよい漁場で色々な魚や鮑や雲丹も採れる。岩場の白い粉は塩のようだ。

ここから正面に「洞山」（どうやま）と呼ばれる洞のある島が見える。

その先に夕陽が沈む景色は庄巻なのだが、なかなかその時間には居合わせない。一旦引き返し、「ととや」にて昼食。部屋から海は見えないが、ピアノの生演奏を聴きながらの句作、食事となる。

千潟へと鳶の一羽が急降下

佳与子

見晴るかす千潟に光る潮の帯

佳与子

潮風の風なだめつつ野あざみに

由紀子

磯遊千潟潮にきらきらと

節子

午後からは「堂山」「洞山」まで行こうと柏原漁港まで行く。狩尾岬と堂山に囲まれた入り江の小さな漁港だが、ランプを吊らした烏賊釣り船が所狭しと停泊している。千畳敷の岩場には浅蛸を採る人、海草を採って海水で洗う人など疎らながらいる。魚市場はガランとしている。採れた烏賊や魚貝類は「海の駅」と大きく書かれた建物内の水槽に入れられ売られ、レストランも併設されている。

烏賊の甲浮きてしずかな港午後

真理子

船ばたに揺らめく光春の潮

節子

舷に水かげろうや春の鳶

由紀子

ひとり来て岩のはざまの浅蜷かく 真理子

のどけしや雁木ずらりと菜を干して 佳与子

揉みし菜を干しをる夫婦汐干潟 光子



汐干潟づたひに洞へ歩けると 光子

島山の延命地藏花あざみ 由紀子

潮引いて涉れる島や花あざみ 由紀子

洞窟の下に残花の舟溜まり 真理子

また「とと市場」に戻り、デッキもある珈琲店「焙煎屋」にて十句の句会。
デッキも気持ちよさそうだが、他の人が入って来ないので音楽を聴きながら
珈琲の香りの中で行なう。

うららかにコーヒー豆を煎るにほひ 光子

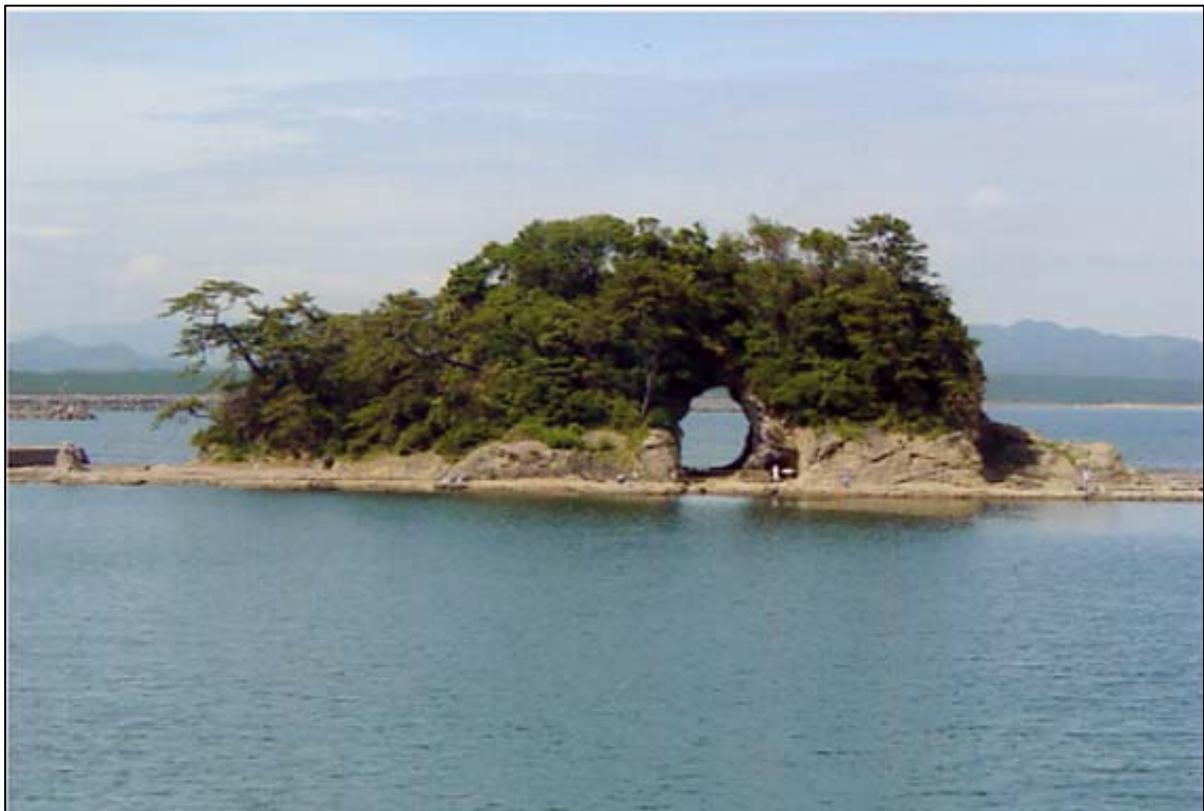
折尾駅まで車で送り解散。



船溜まりの先の堂山には神社が祀られ石塔群が所狭しと並んでいる。それを過ぎると「洞山」と呼ばれる島がある。堤防を越えて歩いて渡る。干潮の岩の乾いた時でないと足が滑って危ない。ちょうど良い時間で洞を間近で見る。落石の恐れから洞の回りはコンクリートで固められて少し興ざめ。洞の上の松は青々と伸びている。



【芦屋海岸付近マップ】



【「洞山」の洞穴】



【芦屋海岸の千畳敷と遊歩道】



第七十九回 吟行記

平成二十三年五月十三日(金)

参加者 佳与子 真理子 由紀子

金比羅池・夜宮公園(北九州市小倉北区・戸畑区)

朝日新聞の北九州版に金比羅池の軽鴨の親子のカラー写真が載った。親鴨に寄り添う子鴨の姿は何とも愛らしい。今月の吟行地をどこにしようか考えあぐねていた時だったので、すぐここを候補に上げる。佳与子さんは

ご自宅に近いので賛成。真理子さんには遠出になると思ったが、金比羅池は初めてらしく賛成。此処に決定。

五月十三日、八幡駅で真理子さんを、高見のマンション前で佳与子さんを車に乗せ、三人で新緑の金比羅池に向う。まだ緑色した羊蹄の花やシロツメグサの丘には何人かの作業員が草を刈り込んでいる。その中を抜けて池に下りて行く。池には浮島もあり、鵜の親子も見え隠れしている。見物の人たちが投げる餌に鴨や鳩も群がり鳴声が騒がしい。写真に掲載された通りに、二組の軽鴨の親子が水辺に構えてシャッターチャン



スを狙っているカメラマンたちを喜ばせるかのように自在に動いている。

バリカンで爪草刈られゆく手入れ 真理子

軽鴨の子の一羽離れて覚束な 真理子

離れたる軽鴨の子一羽すぐ戻り 由紀子

鯉泳ぐ上を軽鴨の子一列に 由紀子

軽鴨の子の動けば動く人の列 由紀子

軽鴨の子の青き水掻よく動き 由紀子



人馴れした鵜や軽鳴の親子に餌を撒くと争奪戦が始まる。軽鳴の子は、すでに自分で餌を突き、鵜の嘴から奪い取りもしている。青鷺はこの様子を他人事のように顔を横に向け、亀はゆつくり動いている。

浮島を中心に池の三分の一くらいに鳥たちが集まっている様子を、カメラマンたちは角度を変えながらシャッターを押している。いつも会う人たちなのか和気藹々に話し込んでいる。この金比羅池の水鳥の写真は、いつも同じ男性が投稿しているようで、一年を通して新聞に掲載された写真を掲示板に貼っている。

かるの子のひよいとくすねし鵜の餌

佳与子

かるの子のあるかなきかの水脈を引き

佳与子

軽鳴の子の鵜の嘴より餌奪ひ

由紀子

荷崩れのように亀落つ青嵐

真理子

すべり落つ亀次々と池日永

佳与子

水鳥から離れ池の回りを散策する。東側の新緑の向こうには「交通公園」や「到津の森公園」、西側には頂上に神社を祀っている金比羅山、その近くには美術館の森が広がっている。気持ちのよい新緑の風に吹かれながら土手の上にある小池を覗いてみる。水草の多い小池には目高が泳いでいる。オタマジャクシがないか目を凝らしてみたが見当たらない。睡蓮の花が一輪開き、睡蓮と葦の間からは鵜の子がスツと寄ってくる。昼時になり草



刈りの作業員たちは休憩しているのか、池は囁りの声がよく響く。近くの和風レストラン「石蔵」で昼食。

若葉風スカーフ首を離れけり

真理子

ここから車で十分程の夜宮公園に向う。ナンジャモンジャ通りの花は殆ど散り、わずかに白い花が咲き残っている。夜宮公園といえは花菖蒲の名所だが、まだ花の時期には早すぎ、二十センチほど葉が伸びている。菖蒲池も菖蒲畑にも作業員が黙々と草取りをしている。手入れあってこそ美しい花だ。この公園も花楓や楠若葉、葉桜など新緑に囲まれての森林浴を楽しむ。



【明専会館の庭】

水嵩を計り手入れや菖蒲池

佳与子

棕櫚の花少し汚れてゐしごとく

真理子

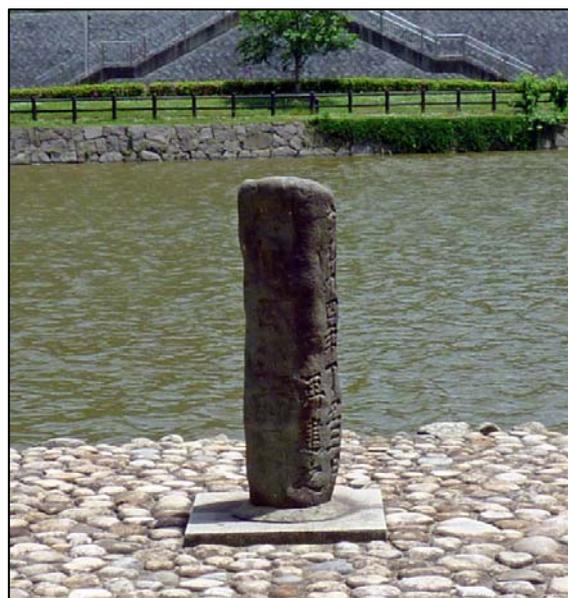
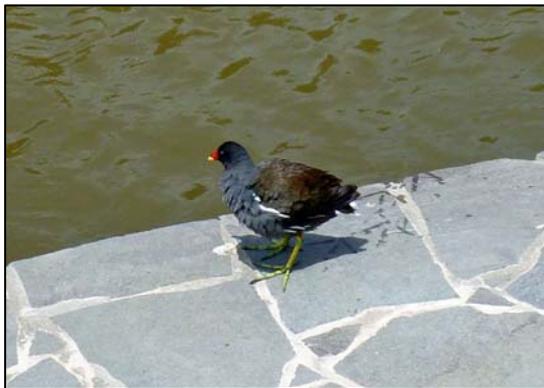
棕櫚の花皿倉山をまなかひに

由紀子

公園横の「明専会館」にて句会。昼時をすぎたレストランには、老夫婦らしいカップルが一組静かに食事しているのみで、芝生の庭園をみながらゆつくり句作、句会。三人ではあったが、軽嶋の親子の可愛らしい泳ぎと新緑を満喫したよき日でした。



【金比羅池周辺】





【夜宮公園】

第八十回吟行記

平成二十三年六月九日(木)

参加者 節子 光子 由紀子

天拝山麓・山神ダム(筑紫野市)

室戸岬から関東方面に向った台風二号の影響もあって、関東地方の梅雨入りは五月二十七日と例年より早く、九州北部の梅雨入りは例年に近い六月五日となったものの、五月下旬より雨の多い日が続く。ぐずついた天気と吟行参加者が三人ということで、吟行は日にちのみ決め、場所は節子さんにお任せすることになった。

吟行当日の六月九日は朝からうつつすらと曇り。晴雨兼用の折畳傘を入れて自宅を出る。快速電車が大野城駅十時十三分に着くと、節子さんの車が駅で待っている。車の中で「太宰府天満宮の花菖蒲池か新緑の山神ダムのど



ちらかにしようと思うが、どちらに行きたい？」と問われる。光子さん共に一度も行ったことのない山神ダムと即答。行き先が決まったところで、久しぶりに武蔵寺近くの森のレストラン「アラスカ」に行く。天拝山の麓の民家を抜け店の入口付近の駐車場に車を止める。滴るほどの新緑の中に、紫陽花やスイカズラの花が遠慮がちに咲いている。この辺りに詳しい人でなければ、この奥にレストランがあるとは思えないほど茂り、小さく置かれた店の看板は、何だか「注文の多い料理店」の入口のようだ。



紫陽花の小径の奥にレストラン

節子

牛蛙間近に鳴いてレストラン

由紀子

沼の風額あじさいを傾けて

光子

池の面に鈍き光や蛇泳ぐ

節子

入口からの細道は少し下り坂になっている。鬱蒼とした道の奥から水音がかすかに聞こえる。幾筋か小流れとなって水が十葉や露草などの草や低木に見え隠れしながら沼に流れこんでいる。葦が生えているので、陸地と

の境がはっきりしない。ログハウス調のレストランのデッキに座ると、道真公のお膝元ではなく、アラスカにいるような気分にもなる。ランチのアラスカサーモンの身が厚い。

水源へ通ずる道の草を刈る

光子

一軒の農家取り巻く植田かな

節子

昼食を終え、節子さん任せの山神ダムへ向う。ダムがどの辺りにあるかも分からないまま、幹線の道から山に沿って奥へ奥へと進む。田には水が張られ、植えられた稲の苗はさやいでいる。民家のみえない曲がりくねった山道を抜け、ようやくダムに到着する。「ダムと山しかない何にもない



所一だと念を押されていたが、堰堤から棚田が見える美しい景色。しばらくダム湖や放水する下の景色を眺め堰堤を渡る。見上げれば泰山木の白い花がいくつも咲いている。声の整った鶯が間近に鳴いている。ダム湖をぐるりと一周する間、鶯、時鳥、郭公の鳴き声がひびく。縄張りがあるのがはっきりわかる。鶯の声が遠くなるにつれ、時鳥の声がはっきりとしてくるし、時鳥の声が遠くになると、次に郭公の声がはっきりしてくる。人とは出会わない。三人のみでこの三声を聞く贅沢。節子さんのお気に入りの場所だと納得。



泰山木咲いてダム湖のあをあと

由紀子

堰堤を渡り老鶯ほととぎす

由紀子

老鶯の自在に啼いて山深く

光子

放水のダムほととぎすかき消され

節子

時鳥山のダム湖をとり囲み

光子

静けさのダム湖を巡りほととぎす

由紀子

筑紫野の深山にひびく時鳥

由紀子

鳴き渡る鳥声を聞きながら、湖畔の草木を節子さんに教えてもらおう。黒っぽい実が「桑の実」と教えられ、恐る恐る口にされると少し甘酸っぱい味がする。赤い木苺をみつける。これは光子さんが口にする。へび苺との区別も教えてもらう。まだ花卉のついた小さな青柿が道に落ちていて。あれやこれや教えてもらいながら、どのくらい歩いたかわからないが、一万歩は越えているだろう。のんびり緑と鳥声の中のダム湖を巡る。郭公の声を後ろに聞きながら、堰堤まで戻る。この辺りでようやく人と出会う。釣りをしてしている人のようだ。

目の慣れて来たる木苺次々に

光子

郭公のまだ啼く山を惜しみつつ

由紀子

山道を下り、句会をすべき喫茶店を探す。植田の中に立つ茶房の案内板通りに行くと、川音と沢山の濃紫陽花に囲まれた茶房は見つかるが、休日のように閉まっている。

帰りの電車の時間もあるので、二日市まで行き「御前湯」そばの珈琲の店に入り句会。「町家カフェー」「軒路地・茶の子」と面白いネーミングのお店は開店二年目。美味しい珈琲と甘味で吟行の余韻に浸る。車で送ってもらい二日市駅で解散。





【山神ダムを望む】



【山神ダム周辺：1】



【山神ダム周辺：2】



第八十一回吟行記

平成二十三年七月十四日(木)

参加者 佳与子 節子 光子 真理子 由紀子

皿倉山頂 (八幡東区)



七月十四日十時半、

八幡駅集合。久しぶりの全員集合である。去年のこの日は、思い出深いどしゃぶりの「追い山笠」吟行だったが、今年は朝から強い日差しが照りつけ、気温も三十四度の予想がでている。八幡駅前に立つと、これから上る予定

の皿倉山の山頂が正面にくっきりと見える。タクシー二台に分乗して、ケーブルカーの山麓駅まで行く。

山麓駅には、一昨年の吟行で来た時と同じように天井に届くほどの大七夕竹が飾られ、幼い字で願い事が書かれた短冊がたくさん結ばれている。

ケーブルカーに乗り込む。乗客は私達の他はおらず、見晴らしの良い最後列に座り、北九州の街並みや工場や海を眺めながら山の上駅まで上る。

木々が覆いかぶさり、紫陽花がまだ咲き残っている所を抜けると、一気に視界が広がる。海と山と市街地を見下ろしながら上っていくこの体感だけでも涼しい。

ケーブルに浴ひゆく山の濃紫陽花

由紀子

夏空をケーブルカーにサンルーフ

節子

皿倉山の九合目にある山の上駅からすぐにスロープカーに乗り換え、頂上まで行く。以前は一人乗りのリフトだったので幼児や高齢者には無理だったが、スロープカーになってから誰でも気軽に頂上まで行けるようになったと好評である。

頂上にはテレビ塔と展望レストランがあるのだが、ここからの眺めは一見いや二見の価値あり。北は市街地と洞海湾を囲む工場地帯、風力発電機とその先の響灘。西には銀色に

光る遠賀川や低い山と田園。東には関門海峡を挟んで、本州と足立山やカルスト台地の山々、その間にうすうすと広がる周防灘。南には福知山山系の山並みが連なり、河内ダムが静かな湖面をわずかに見せている。360度の眺望は、北九州の観光名所の第一とも言えるものである。

老鶯や視界三百六十度

佳与子

夏の霧十基の風力発電機

節子



海峽の灘見下ろされ時鳥

由紀子

周防灘はるかに白しほとどぎす

真理子

頂上は標高622メートルで、気温も住宅街とは五度違う。この酷暑の夏に五度の差は大きく、日陰に座り山頂の風を浴びると心地良く、ちよつと一眠りしたくなる。街騒から離れ、鳥の声が鳴き渡り、虫の音が小さく聞こえる中、石の椅子に腰掛けしばらく休む。それぞれ横になったり、句帳を開いたり、空を眺めたりと思ひ思ひに過ぎす。

空涼し背中合わせに山の石

佳与子

金亀子はるかに洞海湾を見て

節子

ほととぎす帆柱山系鳴き渡り

真理子

夏草を倒して尾根へ抜ける風

光子

山頂に涼しく鳥の鳴いてをり

由紀子

少し山頂の広場を歩いてみる。草原に小さく白やピンクの花が咲いている。常緑の木々の間に合歓の花が淡く咲き、葛の蔓が絡まりつつ伸びている。国見岩に下りて行く径や河内の池に行く径には、たくさんの野草がありそうだが、今回は山頂広場のみで涼む。近くに特徴のある鳴声の鳥がい



る。木の天辺あたりで姿がはつきりと見える。節子さんは「多分ホオジロだと思ふ」と言う。(後でビジターセンターの方に聞くと確かにホオジロと判明)ひとしきり鳴いて外の木に移り、暫くしてから鳴き始める。遠くに時鳥や老鶯が鳴いている。展望レストランにて昼食。ここはセルフのレストランで飲み物だけ注文し、持ち込みのコンビニおにぎりを頬張る。

草笛の音山風に切れぎれに

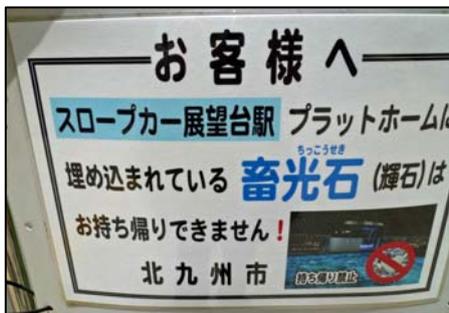
節子

虎の尾に風吹きわたる尾根道に

光子

天辺に鳴くはホオジロ山涼し

佳与子



スロープカーの駅には蓄光石という珍しい石が星座の形に埋め込まれている。夜暗くなると光を放つらしい。蓄光顔料を含むセラミック骨材

で、自然光でこの石に紫外線を充電し、夜その光を放出し光だすという。よく見ると、それらしい石がたくさんある。ハート形の石もたくさんあったらしいが、持ち帰る人が多く「持ち帰り禁止」の札が張られている。山頂での夜のイベントは、きつと眼下の街の光と夜空の星と足元の光で幻想的な雰囲気の中で行なわれているのだろう。

スロープカーで下り、ビジターセンターで句会をしようと歩いていると、一本の大きな木に濃いピンクの花がたくさん咲いている。何の花かと近づいてみると合歓の花。溶けるように淡い色の合歓の花が好きだが、こんなに濃い花もつけるのかと驚きである。これはこれで美しく見事である。

紅濃ゆく匂ふは山の合歓の花

光子

山頂の風に乗りたる夏の蝶

由紀子

山風に吹き上げられて夏の蝶

佳与子



国民宿舎の「山の上ホテル」が「ビジターセンター」になってから何年にもなるが、この帆柱自然公園の生き物や植物などの展示がされている。管理する人もそれらに精通した人達で、質問するとすぐ答えてくれたり、本で調べてくれる。山頂での鳥も、節子さんが鳴きまねすると即答で「ホオジロ」。正しく鳴きまね出来る節子さんはもって凄いが・・・。

ここでNPO法人 帆柱自然公園愛護会発行の本を購入。この山の野鳥をメインに散策コースなどが載っている。その中で帆柱山系という呼び名とそれがどの範囲なのかがよく理解できた。

帆柱自然公園は、皿倉山（標高622m）、権現山（標高617m）、帆柱山（標高488m）、花尾山（標高351m）の4つの山々からなっており、それを帆柱山系という。その最高峰が皿倉山で、北九州のシンボルとなっている。皿倉山に上るケーブルが「帆柱ケーブル」でもよいわけだ。野鳥や野草の宝庫でもあるこの山々にまた登ってみたいとなった。

ビジターセンターにて10句の句会。誰にも邪魔されず、気兼ねせず、涼しい風の抜ける部屋で寛いだ句会となった。





【帆柱ケーブル山麓駅】



【皿倉山頂よりの風景】



【山頂付近の草木】



第八十二回吟行記

平成二十三年八月二十四日（水）

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

地藏盆（小倉北区）



八月下旬、千種さん、温子さん、裕子さんが佳与子さんのお見舞いに一泊の予定で北九州に来られた。お見舞いを遠慮していた九州のメンバーも気持ちだけでも伝えていただきたーと思ひ、急遽同じホテルを予約して遠来の句友達を迎えた。運良く数少ない和室が取れ、料金も格安。案内された部屋は将棋や囲碁の名人戦等が行なわれたという部屋で、二間続きの部屋に、檜の風呂と洗面所が二つある特別室。沈みがちな気持ちにホッと気持ちしが和む。夕食にと出掛けた小倉の歓楽街では思いがけなく「地藏盆」

に出会え、それらを句材にホテルにて七名での句会。清記された各人の句は、翌日佳与子さんに渡すことができた。この来北九州以来、佳与子さんに活力が戻ったことが何よりである。

病む人の手に重かりしぶどう房

真理子

病む友の泣き笑いして親しき灯

由紀子

たまたま行き合わせた地藏盆だが、初めてのものであった。地藏菩薩の縁日（毎月二十四日）は地藏会、地藏祭と呼ばれるが、旧暦七月二十四日については盂蘭盆期間中であり、それにちなんで地藏盆と呼ばれる、全国的に行なわれている風習であるが、特に近畿地方を中心とする地域で盛んに行なわれているとウイキペディアに書かれている。それによると地藏菩薩は中近世以降、子供の守り神として信仰されるようになり、地藏祭には子供が地藏の前に詣り加護を祈る。子供向けに仏僧による読経や法話がおこなわれたり、地藏盆の朝には「数珠回し」といって、直径二〜三メートルの大きな数珠を囲んで座り、読経にあわせて順々に回すなどするらしい。



今日でも地蔵に詣った子供達は、供養の菓子や手料理などを振舞われることが多く、地域の子供達にむけたイベントが行なわれているらしく、京都出身の千種さんによると、地蔵盆は子供の頃の楽しみのひとつだったと言う。

駅前之路地に延命地蔵盆 節子

地蔵盆歓楽街の入口に 由紀子

地蔵盆見過ごしさうな御堂にも 光子

はにかみて菓子授く子も地蔵盆 光子

線香を一本供え地蔵盆 光子

北九州でも行なわれているとは知らなかったが、ネオン街に赤い提灯が飾られ、隅に小さく祀られている地蔵に雨除けのテントが張られている。今年は大鼓や踊りで大々的に開催するとパンフレットも所々に張られている。食事の時間と重なったため、それらを見ることはできなかったが、お参りすると袋に入ったお菓子を渡される。大事にバッグの中に入れ持ち帰る。

太鼓打つ音は地蔵会どこかより 節子

通りたる人戻り来し地蔵盆 由紀子

鷗外の家ほど近く地蔵盆 佳与子



な仲間を作り、こうして一緒に散策できることに感謝。そしてその仲間の健康を祈り、回復を心から祈る。

佳与子さんが、句と一緒に手渡した地蔵盆のパンフレットを見ながら作ったと思われる上記の句のように、地蔵盆の行なわれている通りを東方向にまっすぐ歩くと、左手に「鷗外旧居」がある。雑居ビルの谷間に庭のある小さな二階家がひっそりと建っている。鷗外は第十二師団の軍務部長として明治三十二年六月から明治三十五年の三月までの二年九ヶ月の間、小倉に滞在している。

次の日「貝寄風」発祥の地「鉄王」を散策。あの三三三棟一帯は戸建の住宅街になっているが、まだ少し残っている社宅もあり、あのパン屋も美容院も市場も健在だった。四半世紀前に子育てを共にした仲間が新た



【なつかしい穴生社宅付近】



【鷗外旧居】

第八十三回吟行記

平成二十三年九月八日(木)

高見神社周辺(八幡東区)

参加者 節子 真理子 光子 由紀子

猛暑日の多かった八月が終わると、台風災害のニュースで九月が始まった。暑いことが影響しているのか、今年の台風は速度の遅い雨台風が多く、四国や紀伊半島に甚大な被害をだしている。年々雨の降り様は過去にないような豪雨となり、川の氾濫や山津波を招いている。山間部でも都市部でも、どこが被災地になるか分からない近年の自然災害に不安を感じるこの頃である。

台風の一過とならず山津波

由紀子



九月の吟行は、東京組の来八幡以来元気になってきた佳与子さんへ再度のお見舞いと、体調が許せば一緒に少し散策できるのではとの期待を込めて、高見界限に決める。台風の影響が少なかった北部九州は暑い日が続いていたが、時折吹く風に涼しさが感じられる。

九月八日 木曜日、高見のスーパーの駐車場に集合予定。光子さんは直接車で集合場所へ。節子さん、真理子さんは八幡駅から由紀子車に乗車。福岡方面から



電車で来た二人は、折尾駅や黒崎駅の立ち喰いうどんを食べたとか、食べないとかの話に盛り上がり、あつという間に高見に到着し、光子さんと合流する。

前日佳与子さんから、体調不良のため一緒に吟行はできないとメールがあったが、少しでも食欲がわくようにと手作りの惣菜を持ってきている人もおり、また仕事の都合で7月以来佳与子さんに会っていない光子さんのこともあって、駄目もとで佳与子さんにメールで高見に来たことを知らせ、お惣菜を持って一人で九階の佳与子邸を訪う。半ば強引ではあったが、玄関で渡し帰ろうとすると「吟行と昼食が済んだら皆で寄って」の返事をもらう。

とりあえずこの辺りを散策し、高見神社に参拝して昼食にしようという



してアサギマダラがいた所を通ったが、ほととぎす草に取って代わられ、普通の小道になっていたのは残念である。

秋の蝶美術館への道に消え

由紀子

蝕みは花に及ばず酔芙蓉

真理子

せせらぎに色づき始む実むらさき

節子

一匹の蜂にゆれゐる花みようが

真理子

ことになる。臨機応変というか、状況に合わせて動くことができることが、この会の良いところである。高見の高級住宅街は小高い山を背に、木々や花が溢れている。山側の道には臭木の花や実、仙人草などが咲き、アゲハが飛び交っている。一軒一軒を覗き見ることはできないが、住宅のせせらぎ風の側溝には花が小奇麗に植えられている。少し紫がかっている式部の実、セキシヨウや木賊などもある。以前「フジバカマ」が群生

高見神社には誰も居ず、静けさの中に参拝する。秋祭りのパンフレットが置かれている。新日鐵関係者は、ここで結婚式を挙げた人も多く、子供の宮参り、七五三などお祝いの度に参拝している。こんもりとした木々の中であって、神聖な雰囲気のある神社である。

光子

昼食は佳与子さんお薦めの高見市場にある蕎麦屋「一徳」。蕎麦というより和風スバゲテイが運ばれてきそうな外観も内装もあつさりとしたお店で味も良い。今回は佳与子邸を訪れる時間もあるので、とりあえず句作をしてマンションへ向う。

由紀子

佳与子邸にて三句の句会。句は少ないが、佳与子さんにも選句を手伝ってもらい、いつものように満点句から各々講評。句会を一緒にできたのが、何よりの収穫となった一日であった。





【食事処「一徳」】



【高見神社境内の鯉】

第八十四回吟行記

平成二十三年十月十三日(木)、二十二日(土)

参加者 節子 光子 由紀子

博多秋博(福岡市博多区)



今年も「博多秋博」が開催された。これは博多地区の企業と地域が連携し、にぎわいのある博多のまちづくりを支援する企画で、十月一日から十一月十五日にかけて、多彩なイベントが行なわれている。たとえば榎田神社の「博多おくんち」「中洲まつり」「博多ハロウィン仮装パレード」「東長寺のジャズコンサート」「承天寺のピアノコンサート」「灯明ウオッチン

グ」などである。

福岡市全体で見れば、人の流れは中央区の天神界隈に集中し、博多地区が賑わいを見せるのは主に夏の山笠期間で、キヤナルや博多座など点と点の動きが主流だったが、この秋祭りは、規模も少しづつ大きくなり、認知度も増してきている。特に今年の三月に「FR博多シテイ」が開業してから、博多駅一帯に人が集まり始めているので、これを機に博多商人の町・博多地区の活性化が期待されている。十月の吟行は、博多地区の神社巡りと、まだ見たことのない「灯明ウオッチング」に決定。

まず十月十三日は昼間の神社巡り。博多駅に十時すぎに集合。博多阪急や東急ハンズなどの入った「博多シテイ」前の広場から、さっそく長東寺前を過ぎ、御供所町の寺へと向う。ここは何度来ても静かで、昔の博多が少し残っている。路地には長屋のような家が連なり、玄関に「山笠総代」など山笠に係わる役職名の札が掛かっている。

山笠所縁の承天寺や広い聖福寺の境内には人影はなく、茂った楠の巨木から烏



やヒヨドリの声が響く。寺の長い塀に沿って歩くと、どこからか剪定の音がする。寺の多い御供所町に、それぞれ松手入れの職人が入り、黙々と作業をしている。

寺町の寺それぞれの松手入れ

由紀子

軽トラを寺に乗り入れ松手入れ

由紀子

門内に松の手入れの録音

由紀子



承天寺境内は市道によって二つに分かれているが、山門などある南西の境内の松は伸び放題で、今から手入れするか工事車輛が横付けされている。本堂のある北東の境内は菩提樹の実が少し散らばっているくらいで、方丈の庭は美しく掃かれている。庫裏前の大甕の蓮は枯れたままになっているが、甕の水にその姿を写し、澄んだ水に水草が浮いている。禅寺らしい風情に暫く佇む。

方丈の庭に菩提樹実をつけて

節子

敗荷となりし大甕写経堂

由紀子

昼食は光子さんが探した博多町屋を改装した小さな古民家の二階で頂く。狭い急階段を上ると畳の部屋に四く五席のテーブルが置かれている。白壁に黒い柱がアクセントの店内は、寺巡り後の休息に相応しいゆったりとした雰囲気だ。昼食後、また御供所町界隈を散策し、博多駅近くの珈琲店にて句会。

十月二十二日の「灯明ウォッチング」は、この辺りで約三百年継承されている「千灯明祭」にちなんだもので、博多の秋の風物詩になっているらしい。「灯明ウォッチング」も第十七回となっているので、こちらが知らなかったただけのようだ。ネットでみる灯明の地上絵に期待感が募り、



我らの常宿になりつつある「鹿島本館」に予約を入れる。当日予定の十七時に遅れたものの、無事鹿島本館にて三人集合。あいにく雨のち曇りの天気、何時降りだすかもしれない黒い雲に若干不安を覚えながら外へ出る。

近くの櫛田神社には、すでに大勢の人が出入りしている。境内には和紙の筒に灯明が揺らめき、山笠の清道旗の立つ広場には、灯明で「銀河鉄道の夜」が描かれている。二階から見る灯明の地上絵はまさに幻想的。



路灯のみ辺りを照らしている。近くの高校の校庭を使って大規模な地上絵が灯明で描かれることになっていたので残念だが、灯明に雨では仕方ない。御供所町から大通りの東長寺に節子さんの勧めで寄ると、本堂で「山鹿灯籠踊り」が始まろうとしていた。十一人の踊り子が独特の紙の灯籠を被り「よへほ よへほ」と踊る。思いがけない踊り見物となったが、雨の中を歩いた体に程好い休息。

近くの「冷泉公園」は若者や家族連れでごった返している。ドイツのビールや民族音楽などを楽しむことができるイベントのようだ。奥にはメリーゴーランドまで動いている。テントの中でピザを食べていると、土砂降りの雨。小降りになったところで、寺町の灯明を見ようと御供所町まで歩いてみるが、静まり返っている。灯明は夕方雨で片付けられたらしい。博多駅から宿までの大通りの歩道に置かれた灯明は、ビニールで囲って灯っていたので、少しの雨でも開催されるかもと少し期待したが、街



秋燈に十一人の踊り人

節子

本堂に灯籠踊り秋祭

由紀子

本堂に雨宿りして見る踊り

節子

描かれし Do For Japan 秋灯

光子

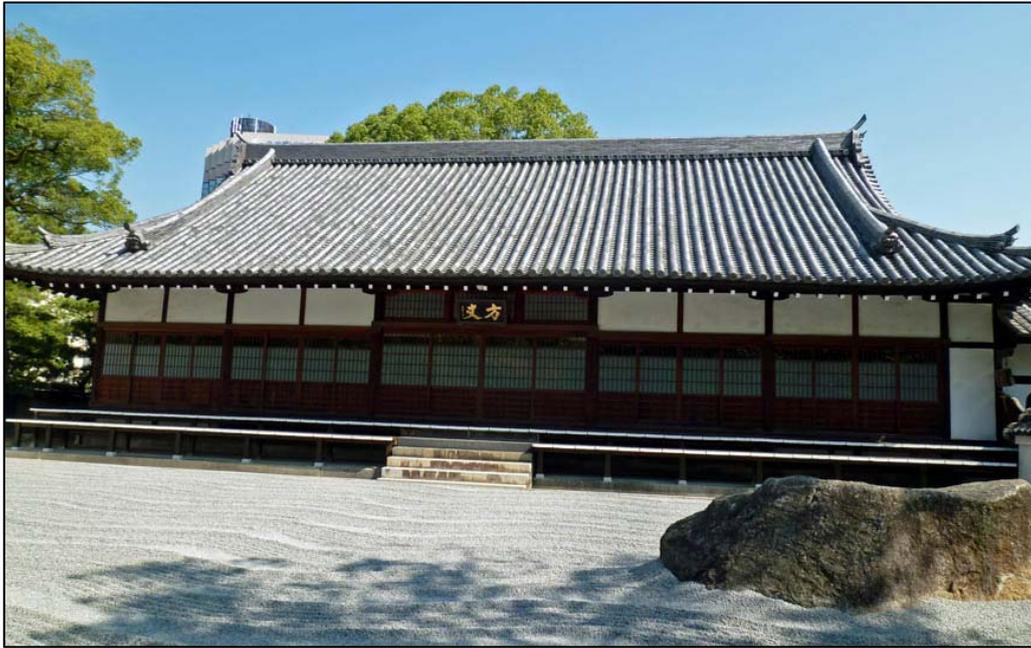
宿近くまで戻り、レストラン「伊 nokuna」で遅めの夕食。美味しいイタリアンをご夫婦で作っている。小さな和風の入口で店内が見えないので、最初は入りにくいですが、生パスタは絶品。宿にて句会。
雨で灯明会場の半分しか見ることとはできなかったが、櫛田神社の灯明地上絵や山鹿灯籠踊りは、泊まりで見る価値のあるものだった。毎年行なわれるようなので、今度はお寺でのコンサートなども考えている。



【夜の寺町】



【朝の榎田神社】



【承天寺の境内】



【東長寺の五重塔とライトアップ風景】

【櫛田神社のライトアップ】



第八十五回吟行記

平成二十三年十一月七日(月)

出石への小旅行

九月下旬、千種さんより十一月八日の「杞陽忌」のお知らせメールが届いた。昇先生が豊岡から退かれると聞いてから、再び「杞陽忌」に参加することも豊岡にも行くこともないだろうと思っていたので嬉しい驚きだった。メールには今年の「杞陽忌」三十年祭をもって区切りにしたとい



うこと、京極高晴氏が直接昇先生に出席を要請され、昇先生も快諾されたことが書かれていた。昇先生が出席となれば是非参加したい。引越しの手伝いなど十一月六日まで用事が入っており、持病の腰痛や体調を考えると「杞陽忌前日句会」参加は少し無理がある。七日の出発を少し遅くして豊岡に着き、八日の「杞陽忌」には体調を整えて臨みたい。九州からは七日の早朝出発で真理子さんが「前日句会」参加。光子さんは七日の仕事を終えてからの出発で、二十一時すぎホテルに到着予定らしい。自分だけの計画を立てる。九州から豊岡に行くには、新幹線姫路駅

より播丹線の特急「はまかせ」に乗り換えるのが最短コース。ただ豊岡まで行く特急の本数が少ない。姫路十三時十七分発の次が十九時二十一分。十三時の特急になると豊岡到着が十四時五十七分である。これだと自宅を九時半に出れば十分間に合う。

「杞陽忌」前日句会のスケジュールは玄武洞や日和山方面を吟行のようで、ホテル帰着が二十一時三十分予定。皆との合流までどう過ごすかが問題だ。到着後このコースを辿ることもよいが、近くに出石(いづし)の城下町があり、小京都のような風情ある町だと聞いたことがあるので、ネットで少し調べ、後は豊岡に着いてから決めることにする。十一月七日、小倉十時五十五分の新幹線「ひかり」に乗車。姫路から特急「はまかせ」で和田山經由豊岡に到着。豊岡の手前で信号トラブルか何かでしばらく停車となり、二十分遅れで到着する。新しくなっている豊岡駅に戸惑いながら、地図を片手にホテルに向う。荷物をホテルの部屋に解いたものの、さてどこに行くか？午後三時半を過ぎての知ら





ない町の一人散策は、観光地の方が安全だ。フロントで出石へのバスの時刻表をもらう。全丹バスで約三十分。終点なので迷うことはなからうと、駅前のバス停から出石行きのバスに乗る。城崎や日和山とは反対方向。観光客らしい人は乗っておらず、学生の乗り降りが多い。枯薄の川辺に沿って走り、やがて集落のような町の通りへと入っていく。山に囲まれた町並みは、こざっぱりしていて終点のバス停のすぐ近くから、大寺の屋根や城跡などが見える。降り立ったのは二、三人の学生と私のみである。

観光案内の地図をみれば、魅力ある場所が随所にあるようだが、初冬の午後四時からの名所巡りは的を絞らねばならない。足早に城址の入口まで行ってみる。山を背に高々とある石垣と紅葉。城址から伸びている道は「大手町通り」で、右に市役所出石支所、左に家老屋敷、「西門跡」、大手町通

りの中心には出石を象徴する「辰鼓楼」(しんころう)。この辺りは土産屋が軒を連ねている。碁盤の目のように真直ぐな道は分かりやすく、名所旧跡の案内標識も辻ごとにある。

芝居小屋の「永楽館」をのぞいてみる。その日は歌舞伎公演があつているようで、中は見学できない。「出石永楽館」は近畿最古の芝居小屋で、明治三十四年から昭和三十九年まで大衆文化の中心として栄えたようだ。平成に入って復活の声が上がリ、平成二十年に再建されたという。

ホテルに帰っても一人なので、ここで夕食を済ませようと出石の名物「皿そば」をいただく。お店は彼方此方にあつて迷つたが、老舗らしい構えと「辰鼓楼」の傍という好立地なお店にする。入口は狭いが、中に入ると広々と団体さん向けのような長机と座布団が置かれている。新しいのか古いのかわからない大掛かりなものがたくさん展示されていて、趣味がいいとは言えない。だだっ広い所に一人座ると全くの場違いな気分になるが、ガラス越しに「辰鼓楼」が真横にあるのが何よりである。

注文した一人分五皿の「皿そば」を持ってきた女性が食べ方の説明をする。





基本的には好きなように食べていただいて構いませんがと付け足して……。

① そばつゆを少し飲んで味わう。

② 一皿目はつゆだけで食べ、二皿目はねぎ、

三皿目から わさび とろろ 卵を入れる。

③ 追加してよし。

④ そば湯を注ぎ飲み干す。

蕎麦を味わうというより、つるりと食べてしまおう。追加もしたかったが、山里の暮れは早く、もう少し歩きたいので、土産用にそばを買って店を後にする。

ちょうど十七時になると「辰鼓楼」から時を知らせる音がする。実際に使われている時計と違っていなかったのでもちよつとびっくり。辰鼓楼は明治四年（1871）旧三の丸大手門脇櫓台に建設された鼓楼。当時は一時

間ごとに太鼓で時（辰）を告げていたらしいが、明治十四年に藩医、池口忠恕氏が大時計を寄贈してからは、時計台として親しまれ、今では三代目の時計が時を刻み続けているという。

この時間にバス停あたりからようやく団体さんが来てすれ違う。どの土産店も開店休業のように人が少なく、中には閉店の準備をしているところもある。土産屋はどこも同じようなものを扱っているの、通りを歩き、城址前の公園に戻る。辺りが暗くなり、広場のフラワーポットに植えられている白い花も見えづら。着いた時、真っ白な花に惹かれて一本手折ったが、この花は蕎麦の花かもしれない。これだけ「皿そば」の店が多いのだから、シンボルとしてフラワーポットに植えられていてもおかしくない。確信があるわけではないが、帰る頃になってそのように思うのが、何とも私らしい。

バス停で豊岡行きのバスを待っている間に周りの山々は真っ暗。豊岡行きのバスに乗り込み出石の町を後にする。中心部のみで全体の三分の一も散策はできていないが、程よい満足感が残る。豊岡駅に二十一時過ぎ到着した光子さんとホテルにて皆の帰りを待ち、予定通り二十一時半ホテルにて皆と再会する。

時雨忌の今も時打つ辰鼓楼

名も知らぬまま秋草を持ち歩き

初冬の野に片濡れの小積藁

新蕎麦をすする早さに山の暮



【出石の町並み】



【出石城址】



【杞陽忌句会】



【神戸新聞（11月9日）掲載】

第八十六回吟行記

平成二十三年十二月八日(木)

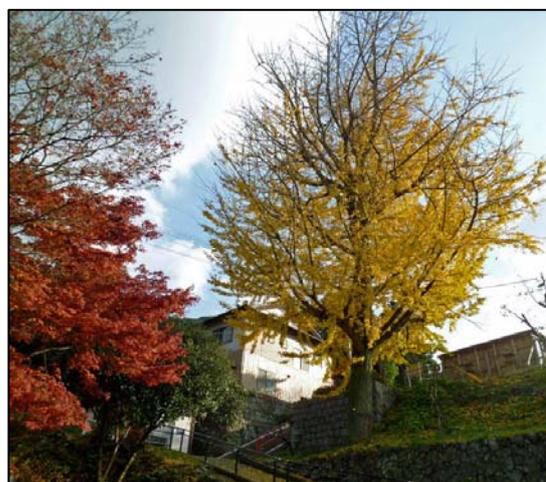
妙見山荘 (小倉北区)

参加者 節子 光子 真理子 由紀子

十二月八日雨のち曇り。参加者の一人(由紀子)が財布を自宅に忘れ、取りに戻るといふハプニングがあり、予定の十一時に少し遅れて小倉駅に集合する。桜の季節に一度利用したことのある「妙見山荘」に十二時予約。駅前からバスで行こうと思っていたが、朝から冷たい雨が降っている。バス停からしばらく歩くことになるので、今回はタクシ



ーで山荘へと向う。メデイアドーム辺りを過ぎると雨は降り止み、どんよりの雲がまだ空を覆っているものの、所々に散り残っている街路樹の銀杏が少し街を明るくしている。平和公園まで来ると、広場の桜はすっかり葉を落とし、忠霊塔がよく見える。そこからぐつと急な坂道を上りつめると妙見神社の鳥居がある。境内の大銀杏はまだ美しく、楓紅葉も少し残っ



ている。神社への石段を横目で見ながら「妙見山荘」の暖簾を潜る。客はほとんど居ないようで、静かな和室に用意された食事を楽しむ。東京での吟行のこと、家族のこと、仕事のことなど、途切れることなく話が続く。選外だが、「聞き流しつつよくしゃべり年忘 由紀子」「身に添へる幸を語りて年忘 真理子」の句のように、皆よく食べよくしゃべる。窓に見える小倉の街の景色や飛び交う鳥を目で追いながらの句友との何気ない話に「元氣」をもらう。まさに年忘れである。

妙見神社の冬紅葉はまだまだ見応えのあるものだったが、お参りはせず、街を見下ろしながらゆつくり下る。時折人や車がすれ違う。鳥声の響きわたる道を下り終えると大通り。近くの「サンマルク」にて句会。



【妙見山荘・平和公園】



短日の急な入院あわただし

佳与子

今回の吟行が北九州だったので、野田夫婦のご出席を願ったが、叶わなかった。花見は一緒にできればと思う。

家族段々増えてきて年の暮れ

節子

冬ざれの道に樟ひこばえて

光子

町抱くやうに広がり山眠る

光子

雨止みし山に日のさし日短

真理子



【冬ざれの「平和公園」】

自選句

(三十八) ~ (四十三)

自選句 三十八

「平成二十二年十二月投句」より

懐手して肩で扉をあけてをり
北風孕む幌のトラック追い越しぬ
留守を守る夫のセーター揃え置き

佳与子



小春日や嬰にいつもの子守唄

診察の結果待つ間の冬の雨

金文字の聖書の表紙冬の月

由紀子

編みかけのセーター脇に膝枕

キリシタンのお掛け絵ときく霜の夜

冬紅葉パイプオルガン聞こえる

光子

早朝の暖房列車の軒かな

何事もなかったように鳩

快方に向かひし病年忘れ

節子

極月の幹に松脂にじみをり

学内にきし献血車クリスマス

着通しのセーターといふ山男

真理子

「平成二十三年一月投句」より

滝の水落ちて出来るし薄氷
よく動く嬰兒の手足初御空
紋付鳥来ては減りをり寒千両

由紀子



校庭のたゞ広々と初雀

雪折の尖りし木肌曝されて

雪あらば雪と遊んで健やかに

光子

札取れぬ子ども不機嫌歌がるた
一通りトランプ花札歌がるた
掘り起こす凍土の下のやわらかく

節子

幣白き行者の滝や大晦日

煙草吸ひ終へたる女またマスク

母に似てきたるまなじり初鏡

真理子

自選句 三十九

「平成二十三年二月投句」より

邪の心ポロンと出たよ鬼やらひ
一日を豆撒くこの寺あの宮へ
わだかまり時にゆだねて浅き春

光子



一歳の子には一つの年の豆
川浴いの梅の林が通学路
護摩焚きの唱名の声節分会

節子

都府楼の草に残れる春の雪
屋根しずる観世音寺の雪も春
海見んと来たる岬の椿かな

真理子

ちよと面をずらし耳打ち鬼やらひ
消えてゆく護摩火に鉦鼓鬼やらひ
立てかけし幣をゆらして春の風

佳与子

なやらひの護摩の火勢のまた強く
鋤き鎌に当たる根もあり寒肥撒く
はまぐりの椀に菜を添え祝ひ膳

由紀子

「平成二十三年三月投句」より

木の橋に佇み浅き春の風
一本の枝垂れ桜に芽吹く紅
控えめで芯のあるひと白椿

節子



梳る風やはらかに芽柳に
鉄瓶の口の真白に春火桶
鳥雲に一船網を落としけり

真理子

春寒の水辺に一人男かな
曲芸のやうに潜りて通し鴨
木の芽風スワンゆっくり動き出す

佳与子

初花を万の蕾に探しけり
大地震に桜まつりの中止札
春寒の大地余震のなほ続き

由紀子

言ふことを聞かぬ父とか春火桶
島に咲く水仙も売り渡船場
筑紫野の夕日の空のつちふれる

光子

自選句 四十

「平成二十三年四月投句」より

とべら若葉漁師町より岬まで
洞窟の下に残花の船溜り
烏賊の甲浮きてしずかな港午後

真理子



春の潮汲みしトロ箱菜を洗ふ
のどけしや雁木にずらりと菜を干して
引き潮に巡る洞山日永かな

佳与子

潮風の抜ける遅日の洞山に
濃き淡き灘の青さに散る桜
地震後の空冷やかに残る花

由紀子

互いの身案じて遠く花薊
磯の香も瑞々しくて春うらら
うららかにコーヒー豆を煎るにほひ

光子

舟ばたに揺らめく光春の潮
自転車の轍花屑集りて
草木瓜の似合う我が家となりにつけり

節子

「平成二十三年五月投句」より

かるの子のあるかなきかの水脈を引き
岸近くなればかるの子一列に
ばらの影のびて階下にゆれてをり

佳与子



鯉泳ぐ上を軽鴨の子一列に
照りかけりして溪谷の若楓へ
新緑の隅に太古の珪化木

由紀子

万緑の懐深く野岩(ヤガン) 鉄道
万緑の旧街道に浴ふ列車
温泉の名の駅つゞく余花の旅

光子

荷崩れのように亀落つ青嵐
右ひだり履き違えたる靴五月
浮島の別天地なる蘆若葉

由紀子

自選句 四十一

「平成二十三年六月投句」より

玻璃越しの守宮をつつくひとりの夜
草に頭をすりつけもして袋角
郭公のまだ啼く山を惜しみつつ

由紀子



ハミングに郭公の声重なりて
五月雨の音に眠れぬ夜をまかせ
夏草や力いっぱいボール打つ

光子

手際よく十葉刻み干されゆく
賑やかな町内会の溝浚へ
駅前に来る夫を待つ夏の宵

節子

鈍屑散りたる中に昼寝の子
葉の裏に翅を閉じる梅雨の蝶
前山に朝な朝なほととぎす

真理子

対岸へ点となりゆく梅雨の蝶
どれどれと夫来てもぎし実梅かな
地に落ちし子燕やつと巢にもどり

佳与子

「平成二十三年七月投句」より

雪溪にわづかにとどく朝日かな
雲の峰我が働ける街の上
すべき事すべからく出来灯涼し

光子

夏草やレールは赤く錆ついて
梅雨明の駅のホームの草の丈
涼風やスロープカーを降りてより

節子

さつま汁の歌口ずきみバンガロー
川の子に子蟹ひととき遊ばれて
谷川へ小便飛ばす跣の子

真理子

天辺に鳴くはホオジロ山涼し
山風に吹き上げられて夏の蝶
星見える小窓ひとつのバンガロー

佳与子

紙縫よる父の太き手星祭
たたなづく嶺々鳴き渡るほととぎす
雨兆す空の暗きに合歡の花

由紀子



自選句 四十二

「平成二十三年八月投句」より



声一つ蟬の時雨に重なりぬ
人知れず呟いている秋の蟬
こおろぎの声まだバリトンバスばかり

節子

蓮茎にしがみつく蟬風のまゝ
金の蕊残りて蓮の散りしさま
不知火や戻り船とも思われず

真理子

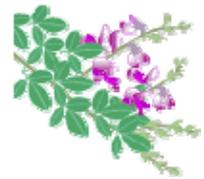
炎帝へ放り上げたし病の根
坑婦の絵記憶遺産に鶏頭花
一人居にまだ慣れぬ夜の初嵐

由紀子

父長く戦争語らず盆の月
初秋や姉さん被りの野菜売り
鎮魂のことば護摩木に大文字入

光子

「平成二十三年九月投句」より



病む人の手に重かりしぶどう房
朽木の戸閉じて宮裏法師蟬
蝕みは花に及ばず酔芙蓉

真理子

かはほりの飛んで街の灯ホツホツと
厨事聞こえ来る路地油点草
大ドジに泣いて笑って油点草

佳与子

夕日傘残る熱気に折たたみ
朝市へ新涼の風連れ立ちて
一軒の駅前旅館油点草

由紀子

葉一枚揺れぬひととき秋冷に
結ばれしみくじみな古り秋の宮
十六夜の星を払ひて上りくる

光子

駅前 の路地に延命地蔵盆
ナイターで運動会の練習と
邯鄲の声高らかな雨上がり

節子

自選句 四十三

「平成二十三年十月投句」より

離れ家に機織の音秋深し
柿渋で染めし糸繰る十三夜
門内に松手入れらし鉄音

由紀子



露霜の小径をたどり坊の朝
鷹柱となりて渡りの一日かな
羽ばたかず悠然として鷹渡る

光子

太陽を背に鷹柱昇りたち
手際よく夫婦無言の松手入
日暮れまで遊び惚けてゐのこずち

節子

初紅葉襖外されゐしを嵌め
猪の罌の入札あるらしく
山葡萄熟れてとどかぬ高さかな

真理子

「平成二十三年十一月投句」より

暁の朝となりゆく冬の空
ひそやかに山に点じて式部の実
山下る道は二手に帰り花

光子

松山のリフトより見る帰り花
満月の未明の伊予に入港す
境内に低く茶の花巡らせて

節子

かりそめの終止符なりし冬の月
白萩の卒寿の病越えし文
麦蒔くや筑紫次郎のふところに

真理子

口惜しと川辺の尾花雑ぐ君は
夕日背にタンポポ綿毛影絵めき
秋落き上弦の月第二幕

勝利

闘病へ二人三脚冬ぬくし
社宅より始まりし句座芭蕉の忌
軽々と流れてゆきぬ式部の実

佳与子

染糸を小積む工房小鳥来る
時雨忌の今も時打つ辰鼓楼
往還の松の太幹冬草

由紀子



あとがき

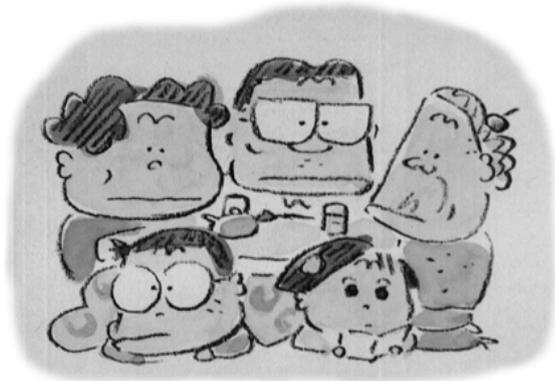
「響風」の発行も七号となりましたが、例年十二月分を翌月の一月に掲載後、製本の編集・構成の準備を行い、何とか二月～三月の発行にこぎ着けて来ました。

一方、編集担当が昨年七月以降、平成十三年以来の東京での単身赴任生活となった事もあり、毎月のホームページ作成の準備が思うに任せず、一ヶ月遅れでの掲載が常態化してしまいました。

加えて、「響風」の発行準備への編集時間が捻出できず、今年は五月の連休を使い、何とか発刊の運びとなりました。こういった逆境を打破すべく、自宅のパソコンを東京からリモートアクセスにて利用できるようトライ中ですが、五月の連休中に全てが片付けばと思う今日この頃。

発行人・編集担当共々、当面の目標として十号発刊の節目までは何とか頑張るようお互いに言い聞かせているところです。

編集後記を練る時間も無いことから、あいたスペースに編集担当の漫画好きの一端として、ファンの一人である「いしいひさいち」の「山田君」一家に登場してもらい、編集後記と致します。



ホームページ・編集担当



響 風 - Hibiki Winds -

あしや句会 第7号

平成24年5月発行

発行人：江本 由紀子